

# 世界で 言葉の 文楽しむ

日本語や韓国語、スペイン語など教力国語で文学作品を朗読して披露するグループ「ピッ・ラ・ルス」がこのほど、発足した。多言語の音を楽しみながら、人と人をつなぐことを目的に、教育機関やラジオ放送などで活動している。

## 通訳ら4人朗読グループ

昨年12月末、甲斐市の双葉西小学校で教員向けの朗読会が開かれた。集まったメンバーたちは「はらぺこあおむし」を4カ国語で行うずつ読み上げた。「チョール」「アンブリエンタ」「ハングリ」「ペッコペッコ」。韓国語、スペイン語、英語、日本語とさまざまな言語が飛び交う。「耳を澄まして対応している言葉や音を楽しんでほしい」と代表でスペイン語通訳の佐藤美智代さん。朗読を聞いた小林実校長は「非常におもしろい試み。学校や図書館など、教育の中にもっと多言語を探り入れていきたい」と話した。



朗読の発表を前に、読み方など最後の打ち合わせをするメンバーたち＝甲斐市志田の双葉西小学校

バーは、甲府市や北杜市など県内で通訳や講師として活躍する日本、韓国、チリ出身の男女4人。「生の声でより質の高い文化情報を伝えて人と人をつなげていきたい」と、目標を掲げている。「ピッ」と「ラ・ルス」はそれぞれ韓国語、スペイン語で「光」を意味するという。

昨年夏、佐藤さんが芥川賞を受賞した中国人作家・楊逸さんが書いた小説「ワンちゃん」を読んだことがきっかけだった。中国語を母国語とする楊さんの作品には「同世代を生きる中国人の生の声がぎゅっしりと詰まっていた。凝縮された言葉のおもしろさに触れることで、日本人と外国人

## 教育・文化

の間の溝を埋めることができなにか……。佐藤さんとメンバーの思いが重なり、会が誕生した。

「活動を通して、日本語の深みを感じた」と話すのはメンバーの1人で韓国出身の安仁淑さん(43)。日本に来て16年がたつ。かつては周囲の目が気になって母国語を話すことをためらい、日本語が話せないと思っていた。しかし、02年の

日韓共同開催のサッカーワールドカップや韓流ブームを機に、少しずつ意識が変化してきたという。安さんは言う。「一緒に共感したり、触れ合ったり、身近なところから交流を始めていきたい」

昨年10月、FM甲府で災害や生活情報を伝える多言語の放送が始まるなど、県内で「多言語」の輪が広がっている。放送は、県立大が中心となって企画して実現した。毎週日曜の午後1時から10分間、週替わりでポルトガル語、中国語、韓国語、スペイン語で災害情報や生活情報などを伝えている。学生やボランティアなど約30人が参加し、4月からは番組枠が30分に拡大するという。

放送に携わる県立大国際政策学部の前沢哲爾准教授によると、多言語放送は神戸市や横浜市、静岡県などですでに実施されているが、県内では初めてという。前沢准教授は「今後はより多くのリスナーに浸透させ、活動を継続していくことが大切」と話している。